

依存するヒト

民族

国家

嗜好品

2023年 11月10日(金)

18時30分-20時40分(17時30分開場)

場 所:日経ホール(東京都千代田区大手町1-3-7日経ビル3F)

参加費:無料(要事前申込み) ※手話通訳あり

定 員:600名(先着順)

※本講演会は会場内での聴講のほか、WEBライブ
中継(要事前申込み)でも参加いただけます。

主催



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

日本経済新聞社



リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

ヒトは依存する生きものである。依存する対象は、ものや行為、人間や他の生きものと様々だが、その中の1つに嗜好品がある。

嗜好品には、酒やコーヒーのように使用や摂取がある程度許容されるものや、大麻や覚せい剤のように法的に厳しい規制を受け、禁止されるものがある。そして嗜好品に依存する状態は、時に依存症という病気のレッテルがはられ、治療の対象として管理される。

一方で嗜好品の位置づけは時代や社会によって変わる。問題となるのは同時代を生きる人々の間で、特定の嗜好品への考え方が異なる場合である。時には依存症への対応を通じた民族や特定の人々への差別や抑圧を生み出すことがある。

本講演では、人間の依存とはなにかを歴史的にひも解くとともに、嗜好品の1つである酒をめぐる民族と国家との相互作用をオーストラリア先住民の事例から紹介する。そのうえで、多様な価値観が共存する社会のありかたを考えてみたい。



松本 俊彦
先生

プロフィール

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長。精神科医。博士(医学)。1993年佐賀医科大学卒業。神奈川県立精神医療センター、横浜市立大学精神科などを経て、現在に至る。日本アルコール・アディクション医学会理事。著者に「誰がために医師はいる〜クスリとヒトの現代論」(みすず書房)がある。

講演要旨

人間は薬物を使う動物である。今回の発表では、そのような人間と薬物とのかかわりの歴史を概観したうえで、一臨床医としてこの問題と向き合う態度について私見を述べたい。

プロフィール

専門は文化人類学。オーストラリアの中央砂漠を中心としたフィールドワークをおこなう。主要なテーマはアボリジニの飲酒やキャンパス制作。業績として『酒狩りの民族誌』(2023年、御茶の水書房)、『分配行為にみるアナングのやり方』(2021年、『文化人類学』86巻2号)など。精神科看護師としての勤務歴をもつ。

講演要旨

オーストラリアではアボリジニの酒への依存が問題視され、規制の対象となっている。本講演は「酒狩り」の事例を紹介し、文化危機に直面するアボリジニの新たな選択を考える。



平野 智佳子
先生

プロフィール

専門は人類学。主要な研究テーマは台湾の文化と歴史、人類史と文明における食事の文化。

野林 厚志 先生

関連プロジェクト

特別研究「個人、帰属集団、国家の意思をめぐる相克の解明と多文化国家の実現」

依存するヒト

17:30 開場

18:30 開会挨拶:八木谷勝美

(日本経済新聞社大阪本社 編集局長)

挨拶:吉田憲司(国立民族学博物館長)

18:40 趣旨説明:

野林厚志(国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・教授)

18:50 講演1「依存症と人類～

人はなぜ依存症になるのか？」

松本俊彦(国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所薬物依存研究部・部長/薬物依存症センター・センター長)

19:20 講演2「文化危機と『酒狩り』～

オーストラリア先住民の選択」

平野智佳子(国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・助教)

19:50 休憩

20:00 パネルディスカッション

20:40 終了

申込方法

国立民族学博物館

🔍 クリック

国立民族学博物館のホームページ内にある申込フォーム画面に従って必要事項をご入力ください。

<https://www.minpaku.ac.jp/>

令和5年10月5日(木)受付開始予定

※参加申込みされた方の個人情報は本講演会及び次回以降の講演会案内でのみ使用いたします。

お問い合わせ先

国立民族学博物館 研究協力課 TEL 06-6878-8209



講演会場

- 東京メトロ
千代田線「大手町駅」神田橋方面改札より徒歩約2分
- 丸の内線「大手町駅」サンケイ前交差点方面改札より徒歩約5分
- 半蔵門線「大手町駅」皇居方面改札より徒歩約5分
- 東西線「大手町駅」西改札より徒歩約9分
「竹橋駅」4番出口より徒歩約2分

●都営地下鉄

- 三田線「大手町駅」大手町方面改札より徒歩約6分

